

国語科

他者の言葉とのかかわり合いをとおして、言葉の世界をひらく

—第3学年 説明的文章の実践をとおして—

杉川千草

1. はじめに

国語の教科書で学ぶ説明的文章は、子どもたちにとって身近な話題や興味・関心のある事柄について書かれている。そのため、これまでの自分の実践を振り返ってみたときに、内容に偏った読み取りや段落相互の関係や要点をつかませることに終始してしまいがちであった。

本来、説明的文章の読みの構造は、「表現を手がかりにして内容をとらえ、内容相互の関係を明らかにしようとするとき、結果として、文章の書き手である筆者によって創造された『論理』に出会うことになる。この『論理』に主体的に対応することが、本来的な（自然な）読みである。」¹⁾べきものである。

そこで、内容とともに論理についても、子どもたちが主体的に読むことができるような説明的文章の授業づくりに取り組みたいと考えた。

2. 研究の構想

(1) 他者の言葉とのかかわり合いをとおして、言葉の世界をひらく

日々の国語科の授業において、子どもたちは、さまざまな他者と出会っている。同じ教室の中に目に見える形で存在する他の学習者や教師などのほか、テキストの筆者や過去の自分など、目に見えない存在としての他者である。

子どもたちは、さまざまな他者の言葉とのかかわり合いをとおして、自分の言葉を見つめ直し、新たな言葉を獲得していく。また、学習の深まりを確かめたり、他者とともに学習することのよさ

を実感したりする。そして、このような営みを繰り返すことによって、語彙を増やし、表現力を豊かにするとともに、新たな認識を広げ「言葉の世界をひらく」ことができると考える。

(2) 言葉の世界をひらくために

言葉の世界をひらく学習とするために、次のことに留意した単元（授業）構成を行う。

①単元構成や教材との出会わせ方を工夫する

子どもたちは、社会や学習の中で、さまざまな他者の言葉に出会う。子どもたちが言葉の世界をひらくためには、言葉への興味・関心を引き出し、課題意識や目的意識をもつことが大切である。

3年生の子どもたちは、説明的文章の論理よりも内容に着目しがちな段階であり、筆者の工夫に目を向けられる子どもはほとんどいない。そこで、単元構成や教材との出会わせ方を工夫し、題名読みでイメージを広げさせたり内容を予想させたりすることによって、読みの課題意識をもたせる。また、学習課題や発問、他の説明的文章との比較によって、筆者の存在に目を向けさせ論理構成に着目させるようにする。そのことによって、接続語の使い方や論の進め方など、言葉や文、段落などに気を付けさせながら、筆者の主張を読者に効果的に伝えるための表現の工夫も意識させるようにする。

②個の考えをもたせ、他者と交流させる

年度当初、子どもたちは、間違いを恐れるためか、自由に発想することや発言することを躊躇してしまう傾向が見られた。そのため、一つの考え方で満足したり、他者の意見を十分吟味することもなく受け入れたりしてしまいがちだった。

そこで、一つひとつの言葉から感じたことや率

直な疑問などを書き込むことによって、自分の考えをもたせるようにする。そして、一つの課題に向かって、自分たちの考えをお互いにかかわらせながら学習を深めていくことができるような授業づくりをしていく。このような学習を繰り返すことによって、他者とともに学ぶことのよさを実感させ、子どもたちの主体的な学びを生み出し、学ぶ意欲を継続させるようにする。

このように、子どもたちが言葉にこだわりながら吟味を重ねることが、言葉の世界がひらかれ、思考を広げたり深めたりし、言葉を豊かにすることにつながると思う。

3. 実践1「自然のひみつ『ミラクル ミルク』 中西 敏夫」（平成22年6～7月実施）

(1) 授業の構想

①単元について

本単元は、「とんぼのひみつ」「ミラクル ミルク」という二つの説明文を読む学習で構成した。説明文は、どちらも「話題提示」「問題提示」「問題の答え」「まとめ」という構成になっている。また、「ところで」「このように」などの接続語によって段落のまとまりが明確で、相互の関係もとらえやすく、中心となる語や文がはっきりしている。内容は、子どもたちにとって身近な題材が取り上げられており、「ひみつ」「ミラクル」という言葉で、読者の興味を引きつけるものになっている。ここでは、自分の予想と比べながら筆者がどんなことをどのように述べているかを読み取らせるとともに、既習事項を生かして、段落ごとの要点をまとめることのできる力を身に付けさせるようにした。

「ミラクル ミルク」の学習では、既習の知識を交流したり題名から内容を想像したりすることによって、内容に興味をもたせるとともに、課題意識をもって、言葉を吟味しながら内容を読み取らせるようにした。また、段落ごとの読みでは、「とんぼのひみつ」で学習した段落構成や接続語の使い方を確認しながら読み進めさせた。さらに、

「たくさんのふしぎ みらくるミルク」(中西 敏夫)を紹介することによって、筆者がなぜヨーグルトとバター、チーズの三つのミラクルを選んで述べているのか考えさせるなど、筆者の意図や論理構成の工夫に気付かせていくようにした。

②目標

- 自分の予想を筆者の考えと比べたり友だちと交流したりすることによって、読みの課題意識をもち、表現方法の工夫に気付くことができるようにする。
- 中心となる語や文に気を付けて、段落ごとに要点をとらえながら読むことができるようにする。
- 身の回りのいろいろな食べ物にこめられた先人の知恵や工夫に気づき、食文化のすばらしさに気付くことができるようにする。

③学習計画（全10時間）

- 第1次 「とんぼのひみつ」を読もう・・3時間
- 第2次 「ミラクル ミルク」を読もう・7時間

(2) 授業の実際（A児の記録を中心に）

〈第1次 「とんぼのひみつ」を読もう〉

○ 第1時

まず、題名にある「とんぼ」について知っていることを挙げさせた後、「とんぼのひみつ」という題名を提示し、内容を予想させた。

日本一大きいとんぼは、たぶんオニヤンマだと思います。なぜそう思うかは、Iさんとわたしがようちえんの年中だったときに、オニヤンマを見つけて、とても大きかったから、日本一大きいとんぼだとわたしは思います。

その後、本文を読み、初めて知ったことや疑問に思ったこと、もっと知りたいことなどの感想を書かせた。

なぜ「とんぼのひみつ」というだい名をつけたかは、「あなたにとんぼのひみつを教えてあげるよ。」という意味だと思います。知りたいことは、世界一大きなとんぼの名前です。

○ 第2時

次の時間は、前時に子どもたちが書いた初発の

感想を一覧にして配布し、お互いに交流させた。また、「疑問に思ったこと」「もっと知りたいこと」に挙がっていた内容から、この説明文を読み取るための学習課題を考えさせた。その結果、『とんぼのひみつ』を読みとって、とんぼはかせになろう。「なぜ題名が『とんぼのひみつ』なのだろう。」という二つの学習課題にまとめ、本文に書き込みをしながら内容を読み取らせた。

○ 第3時

本時は、それぞれの段落で読み取った内容をワークシートにまとめ、わかったことや考えたことなどを書かせた。

今日の学しゅうかだいは「とんぼはかせになろう。」だったけど、ひっしやさんのわかりやすく楽しく読める言葉づかいがべん強できたから、作文・せつ明文はかせになれてよかったです。

〈第2次 「ミラクル ミルク」を読もう〉

○ 第1時

本時は、既習の知識を交流したり、題名から内容を想像したりすることによって、内容に興味をもたせるとともに、「ミラクル ミルク」を読むための課題意識をもたせることをねらいとして、授業を行った。

まず、「ミラクル」という言葉を提示し、知っていることを挙げさせた後、「ミラクル ミルク」という題名を提示し、内容を予想させた。

わたしはこの「ミラクル ミルク」のお話は、たぶん変化・びっくりするミルクのひみつの話なんだと思います。理由は、ミラクルはふしぎな起きごと＝びっくりになるし、びっくりすることはとくに変化だからです。

その後、本文を読み、初めて知ったことや疑問に思ったこと、もっと知りたいことなどの感想を書かせた。

どうして中西さんは、ミルクの話を書いたのかが知りたいです。理由は、まとめに書いてあるさい後から二行目の「人々の気もちとくふうが表れているのではないのでしょうか。」というところのとおり、人々の気もちとくふうを表す食べ物だったからじゃないかなと

考えています。

○ 第2時

次の時間は、前時に子どもたちが作った学習課題を一覧にして配布し、この説明文を読み取るためにふさわしいものを考えさせた。その結果、内容と筆者の言いたいことについて読み取るために「筆者はどんなことをどのようにせつ明しているのだろう。」という学習課題で読み進めることにした。

○ 第3時

本文に書き込みをし、内容とともに筆者の話題提示や問題提示の仕方の工夫について考えながら読み取らせた。

ひっしやさんのくふうは、今回は三つくらいあったと思います。一つめは、問題を後に書くことです。みんなもいろいろ意見を出してくれたけど、わたしはまづ話題になじませて、答えやすくしていることだとよそうします。二つめは、話題を三つに分けていることです。理由は、三つに分けることで少しずつ話題をミラクルミルクに向けていって、「自ぜんにミラクル(ふしぎなこと)をミルクが起こすことを知ってる?」と、まるでめいろからまい子になった人をたすけ出すように、みちびいているんだと思います。三つめは、どんな話題をすすめるうちに、「この先の『ミラクル ミルク』はどんな話なのかな?」と思うようにしていることです。その方が読んでくれてひっしやさんもうれしいし、みんなもワクワクドキドキするからです。

○ 第4時

本文に書き込みをし、一つめと二つめのミラクルの内容と説明の仕方の工夫について考えながら読み取らせた。

今日もたくさんひっしやさんのくふうを見つけました。一つめは、わたしたちでも作れるようなミラクルを書いている。このことに気づいたのは、六だんらくめのバターの作り方です。「だってふるだけでしょ。かんたんじゃん。」と思ったからです。だから一つ分かることは、このひっしやさんはやさしいということです。二つめは、だんらくが変わるごとに言葉を変える。これはRさんが発表したときに思ったことです。

「五だんらくには『ミルクの変身』と書いているけど、六だんらくは『ミラクル』と書いています。」と言いました。その時わたしは、「そうか、二回同じ言葉をつづけるとおかしいんだ。」と思ったのです。少ないですが、中身がすぐつまったポイントが見つけれられてよかったです。

○ 第5時

本文に書き込みをし、三つめのミラクルの内容と説明の仕方の工夫について考えながら読み取らせた。

今日は、三つめのミラクルのチーズのべん強をしました。二つしかないけど、ひっしゃのくふうをしようかします。一つめは、人間が動くだけでできる物を書いている。これは五・六だんらくのとおり、五だんらくはただ暑い所においておくだけでできるし、六だんらくは前も書いたと思いますが、ふるだけ→かんたんです。そして、七・八だんらくはチーズです。「チーズは、人間が暑い所を歩くだけでいいでしょ。」というくふうです。二つめは、なぜそうなったかという理由を書いている。これは、八だんらくでわかります。たとえば、「子ひつじの胃には、ミルクの中のたんぱくしつをかためるはたらきをする物があつたのです。」というように書いているということです。

○ 第6時

本文に書き込みをし、内容とともにこれまでの学習を振り返りながら筆者の伝えたいことを読み取り、筆者の意図や論理構成の工夫について考えさせた。

(前略)

T：筆者さんはこのまとめで何が言いたいのかな。

P：たぶんみんなに、ミルクを大事に使うということを教えたいんだと思います。

P：Yさんに似ていて、今は世界中の人が牛乳を大事に使っているということを教えたかったんだと思います。

P：世界中の人がミルクを大切にしているということ教えたかったんだと思います。

P：ミルクの大切さとミルクはどんな物かを教えてあげたくて、まとめを書いたんだと思います。

T：それを教えてあげたかったために、筆者さんは答えの所のお話を三つもつてきてましたね。こんなにいっぱいあるってわかったのに、たった三つにしたのは、なぜ？

P：みんなが知っている物の中で代表を三つ決めて、ヨーグルト、バター、チーズになったんだと思います。

T：代表。なんでこの三つを代表にしたんかね。

P：みんながよく知っているからです。

P：栄養があつて、昔からあるからだと思います。

T：では、この三つの紹介がしたいんだけど、どうして1番がヨーグルト？2番がバター？3がチーズ？

P：ヨーグルトの説明で五段落に「人間がミルクから作り出したさいしょの食べ物」と書いてあるから、できた順番に書いたんだと思います。

P：みんながよく食べるから書いたんだと思います。

P：ヨーグルトにもバターにもチーズにも作り方はそれぞれあるけれど、ヨーグルトが一番材料や作り方も書いてあるし、バターは簡単だから短くて、チーズはどうやってできたかと、なんでそんなふうになったかという詳しいことを書いているから、詳しい物じゅんだと思います。(A児)

T：今まで出ていること以外で筆者さんの工夫を見つけた人はいますか。

P：最後に問題を書いています。

P：私はこの九段落をまとめにした理由なんだけど、結局筆者さんはこうやって、はじめは話題で哺乳動物のことを書くということから始めて最後まで来たときに、動物のおかげで人間が生きているから、その一つとしてミルクを書こうと最初考えて「じゃあ教えてあげなくちゃ。」というふうに思ったから、最後に「ミルクを大じにつかいたいという、人々の気もちとくふうが表れているんじゃない？」っていうふうに動物の物は大切にしようということ、最後にまとめて表したんだと思います。(A児)

P：本当は筆者さんはわかっているんだけど、みんなに調べてもらいたいから、こういう書き方をしたんだと思います。

P：たぶん筆者さんは、読んでいる人に最後に問題があるのをみんなで見つけてほしかったんだと思います。

P：中西敏夫さんは「人々の気もちとくふうが表れているのではないのでしょうか。」と書いて、自分はわかっていると思うけど「みなさんはどう思いますか。」と質問しているんだと思います。

(後略)

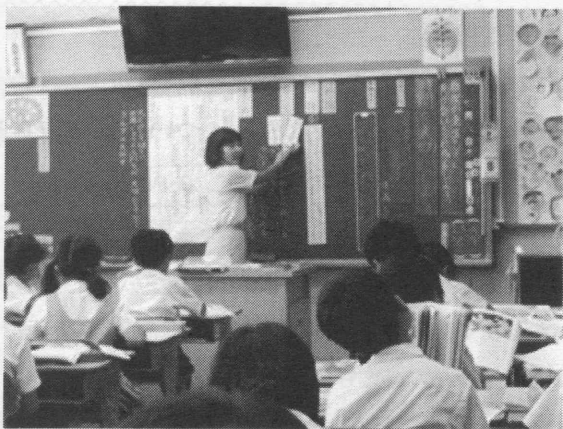


図1 筆者のくふうは…

わたしは、九だんらくさい後の「人々の気もちとくふうが表れているのではないのでしょうか。」の問題に答えたいと思います。答えは「表れている。」です。それは七だんらくでわかります。理由は、「チーズを作るときのもとが、暑いさばくをぬけて、夕方ミルクを飲もうとすると、白いかたまりができた。」ということです。そして、もとからくふうしたからこんなにおいしいチーズができるんです。そして、これが答えになるのです。だから、ひっしやはさい後を問題にして、教科書からみんなにさがしてほしかったんだと思います。

○ 第7時

これまでの学習内容を振り返らせ、単元を終えた。

4. 実践2「くらしを見つめて『年の始まり』

宮本 袈裟雄」(平成22年11月～平成23年2月実施)

(1) 授業の構想

① 単元について

本単元は、「年の始まり」についての説明文を読む学習と、自分の地域の年の始まりの行事につ

いて調べて発表する学習で構成した。説明文は、全体が六つのまとまり(意味段落)に分けられ、「年の始まり」の三つの考え方を提示したうえで、子どもが活躍する各地の年の始まりの行事が具体的に説明されている。子どもたちは、この学習を通して、今まで何気なく経験してきている年の始まりの意味を考えたり、いろいろな行事に込められた人々のさまざまな願いに改めて思いを馳せたりすることができると思った。ここでは、筆者がどんなことをどのように述べているかを読み取らせると共に、調べ学習を通して、自分たちの地域の新年を迎える行事に込められた人々の思いや願いに気付かせるようにした。

指導にあたっては、まず、自分たちの地域の年の始まりの行事に興味をもたせることによって、課題意識をもって説明文の内容を読み取らせるようにした。段落ごとの読みでは、それぞれの行事が「いつ・どこで・何を・だれが・どのように」するのか、「何のために」行われているのかなどを確認するとともに、全体の段落構成をとらえさせた。さらに、筆者が読者にどんなことを伝えるためにどのような内容を書いているのかを、自分たちの地域や他の地域の年の始まりの行事と比べさせることによって、筆者の意図や論理構成の工夫に気付かせるようにした。また、調べ学習では、自分たちの地域の行事の意味を改めて考えさせ、行事に込められた人々の思いや願いに気付かせるようにしたいと考えている。

② 目標

- 自分の予想を筆者の考えと比べたり友だちと交流したりすることによって、読みの課題意識をもち、新年を迎える行事に込められた人々の思いや願いに気付くことができるようにする。
- 段落のまとまりをとらえ、中心となる語や文をおさえながら、内容や表現の工夫を読み取ると共に、筆者の表現方法の工夫を生かすことができるようにする。
- 調べた事柄について、メモをもとに筋道を立てて報告したり、発表の中心を考えながら聞いたりすることができるようにする。

③学習計画（全16時間）

第1次 年の始まりの行事を見つけよう・1時間

第2次 「年の始まり」を読もう・・・9時間

第3次 クラスのみんなに紹介しよう・・・6時間

(2) 授業の実際（A児の記録を中心に）

〈第1次 年の始まりの行事を見つけよう〉

説明文を読むにあたり、まず、正月とはいつのことなのかを考えさせた。また、自分の家や地域で、新しい年を迎えるために、あるいは正月にどんなことをするかを出し合わせ、その中の一つを選んで、説明する文章を書かせた。

ししまいというのは、お寺に町の人が集まって宮司さんを待ちます。ししをかぶった宮司さんが出てきて、たたみの上を走ります。ししに頭をかまれたい子どもは、宮司さんに向かって「かんでー、かんでー。」と言って、頭をかんでもらいます。かまれた人は、一年が幸せにすごせると言われています。

〈第2次 「年の始まり」を読もう〉

自分たちの書いた説明文と比べながら「年の始まり」を読み、初めて知ったこと、自分の家や地域の行事や祭りと比べて考えたことなど、感想を書かせた。

わたしは、「年の始まり」を読んで、知らなかったことがたくさんわかったことになりました。（中略）ほとんどの年の始まりの行事は、子どもが主役なのがいいなと思います。理由は、ししまいは大人が主役だからです。年の始まりの行事はたくさんあるから、それだけ大事なんだと感じました。もっと年の始まりのことを知りたくなりました。

また、疑問に思ったことや知りたいこと、もっと読み深めたいことやみんなで考えたいことなど、学習課題を作り、単元の大まかな学習計画を立てた。

○ 第一段落

「なぜ正月には、一年の始まりをいわる行事をするのだろう。」という学習課題をもとに、年の始まりについてのいろいろな考え方を読み取らせた。

わたしは一段落を、みんなと読み取ってさらに深く

考えることで、初めて「年の始まり」を読んだときよりもたくさんのことを学びました。一番おどろいたことは、正月の本当の名が「大正月」だったということです。なぜ「大正月」が「正月」になったのか、これは私の考えですが、さい近は昔のように小正月がないので、ちぢめて「正月」になったのだと思います。

○ 第二段落

「わか水はどんな行事か読み取ろう。」という学習課題をもとに、若水汲みについて読み取らせた。

わたしは今日、自分の考えがたくさん発表できたのでよかったです。考えていたけど言えなかった大発見があります。子どもたちは神様で、神様がくれた水にはとくべつな力がこもっているの、お礼に「ありがとう。」という気持ちでほとけ様や神様にそなえるんだと思います。だから、わか水にはとくべつな力があって、命や心を変えるんだと思います。

○ 第三段落

「火祭りはどんな行事か読み取ろう。」という学習課題をもとに、火祭りについて読み取らせた。

わたしはきのうよりもすごい発見ができました。（なぜ火祭りの名前がちがうのかわかったぞ!）「さいの神」というのは、もう一度神様とさい会したいというねがいからつくられたのだと思います。

○ 第四段落

「小正月に子どもたちが家々を回って歩く行事について読み取ろう。」という学習課題をもとに、三つの行事について読み取らせた。

今日は小正月に子どもたちが家々を回る行事を読み取りました。「なる木ぜめ」がさるかにかっせんとした行事だったとわかったのでうれしかったです。人間のねがいでたくさんのがんごができたんだと思いました。

○ 第五段落

「節分に行う行事について読み取ろう。」という学習課題で、豆まきについて読み取らせた。

わたしは年神様とわか水くみ、なる木ぜめ、豆まきを全てつなげて考えてみました。そうしたら、年神様

はとてもすごいことがわかりました。(中略)このように、年神様はいろいろな行事とかかかわっていることがわかります。だから、いつも天から見守ってくれているし、正月の時などは身近な物になって悪をはらってくれます。この年神様が出てくる行事をしょうかいしてくれる筆者さん、ありがとう。

また、これまでに学習した二～五段落の行事の内容や願いを表にまとめて整理した。

○ 第六段落

「筆者はどんなことを伝えたかったのだろう。」という学習課題をもとに、筆者の伝えたいことを読み取らせた。そして、既習教材の「ミラクル ミルク」は、「話題・問題・答え・まとめ」になっていたことを確認した後、「年の始まり」の段落構成や筆者の意図について検討させた。

(前略)

T：「年の始まり」に「問題」があったかね。

P：一段落のところで松の内と小正月と立春の話をして、二段落から年の始まりにする行事の説明をしているんだと思います。

P：「ミラクル ミルク」は問題があったけど、「年の始まり」は問題を出していません。

T：二段落から五段落は何なの？

P：問題はなくて、説明だけなんだと思います。

P：Rさんに付け加えて、このお話は問題じゃなくてそのまま答えを教えたいんだと思います。

T：説明文なのに、問題がなくていいかね。

P：二段落から五段落が問題で、六段落が答えとまとめだと思います。まず、問題で行事を出して、六段落で、なぜ子どもたちが行事の主役なのかというと、二段落から五段落が問題で、六段落が答えとまとめだと思います。(A児)

T：今まで習ってきた説明文とは違って、「話題・問題・答え・まとめ」という順番じゃなくても説明文を書くことができる。本当なら話題の次に問題がくる。問題を書いていないのに、なぜみんなに伝えたいことがよく伝わったのかね。

P：たぶん「年の始まり」という題名が読んだ人に伝えるように書いたんだと思います。

P：問題を書いたら、大人がする行事のように読み取られるからです。

P：話題で子どもの行う行事を書いたらそこでそのまま問題が出せたと思うんだけど、年の始まりの考え方しか出さなかったから、六段落と一緒に子どもたちのことを書いたんだと思います。(A児)

(後略)



図2 筆者の伝えたかったことは…

今日、筆者の工夫がたくさん見つかりました。一番すごかったのは、わざと問題を書いていなかったことです。感心してしまいました。説明文を書くことは宮本袈裟雄さんのとくぎなんだ。だから、こんなに上手に書けるんだと思います。

○ まとめ

「筆者の工夫をいっぱい見つけよう。」という学習課題をもとに、これまでの学習を振り返らせ、自分の説明文に生かしたいことをまとめさせた。

わたしのせつ明文に一番生かしたいことは、コメントをつなぐように、今までのことをつなげて書くことです。「年の始まり」を勉強してわかったことは、「ミラクル ミルク」いがいの書き方があるということです。筆者さんには、たくさんのわざがあるんだと思いました。

〈第3次 クラスのみんなに紹介しよう〉

年末年始にかけて、年の始まりの行事について調べたり新聞記事を集めたりする学習を設定した。その中から自分が紹介したい年の始まりの行事を選ばせ、これまでの学習を生かした説明文作りに取り組ませたいと考えている。

5. 考察

言葉の世界をひらく学習について、二つの実践から考察する。

(1) 単元構成や教材との出会わせ方について

実践1では、内容や論理構造が似ている二つの説明文をセットとして扱うことによって、既習内容と関連付けながら、段落相互の関係や筆者の工夫に着目させることができた。

実践2では、説明文を読む学習と、自分の地域の年の始まりの行事について調べて発表する学習で構成した。そのため子どもたちは、説明文の内容を地域の行事と比べながら読んだり、今まで何気なく経験してきている行事の意味を改めて見つめ直したりすることができた。また、既習の説明文の論理構成と比較することによって、筆者の意図に気付くことができた。さらに、単元の初めの段階で、説明文の読み取りの後に地域の行事についての説明文を書くという学習計画を立てていたため、筆者の意図や論理構成の工夫についても、課題意識をもって学習を進めることができた。

このように、単元構成や教材との出会わせ方を工夫することによって、子どもたちの興味・関心を引き出し、課題意識や目的意識をもたせた学習を展開することができたと考える。

今後、実践2については、子どもたちが書いた説明文にこれまでの学習内容がどのように生かされているのか、地域の行事の意味をどのようにとらえているのかなどについて検証し、表現力を高めていくことにつなげていきたいと考えている。

(2) 学習の様子から

どちらの実践でも、一つひとつの言葉から感じたことや率直な疑問などを本文に書き込み、授業の中でそれらを交流することによって、段落ごとに学習課題を解決していくようにした。子どもたちは予め書き込んだものがあるので、自信をもって自分の考えを述べ、他者との交流を通して自分の考えを深めることができた。また、学習課題や発問によって、内容だけでなく、筆者の主張や段落構成、題名や例示の方法など、筆者のさまざま

な工夫についても目を向けることができた。

このように、子どもたちが言葉にこだわりながら吟味を重ねることが、言葉の世界がひらかれ、思考を広げたり深めたりし、言葉を豊かにすることにつながったと考える。

その一方で、現段階では内容を限定せずに自由に書き込ませたので、必ずしも学習課題に直結しないものも見られた。今後は、授業のねらいに合わせた個の読みのもたせ方を探っていきたい。

6. おわりに

今回の実践を通して、説明的文章の内容とともに論理を読み取ろうとする姿勢が、子どもたちにある程度育ってきたことが感じられた。しかし、自分の考えを吟味したり、友だちの発言をしっかりと受け止めお互いにかかわり合いながら学習を深めたりしていくことは、まだ十分とは言えない。

今後も、みんなで学習することの意義を考えさせながら、他者の言葉とのかかわり合いを大切にしたい授業づくりに取り組んでいきたい。

<引用文献>

- 1) 森田信義・山元隆春・山元悦子・千々岩弘一：「新訂国語科教育学の基礎」, p.136, 2010, 溪水社.